

V 章 倭国論

我が国の「倭国」研究は、今もって、中国正史の”管理下”にある。
『後漢書』が「台」と言えば「台」となり、『紹熙本』が「壺」と言えば「壺」となり、『御覧魏志』が「台」と言えば「台」となる。

内藤湖南：邪馬壺は邪馬台の訛なること言ふまでもなし。『梁書』『北史』『隋書』皆台に作り。

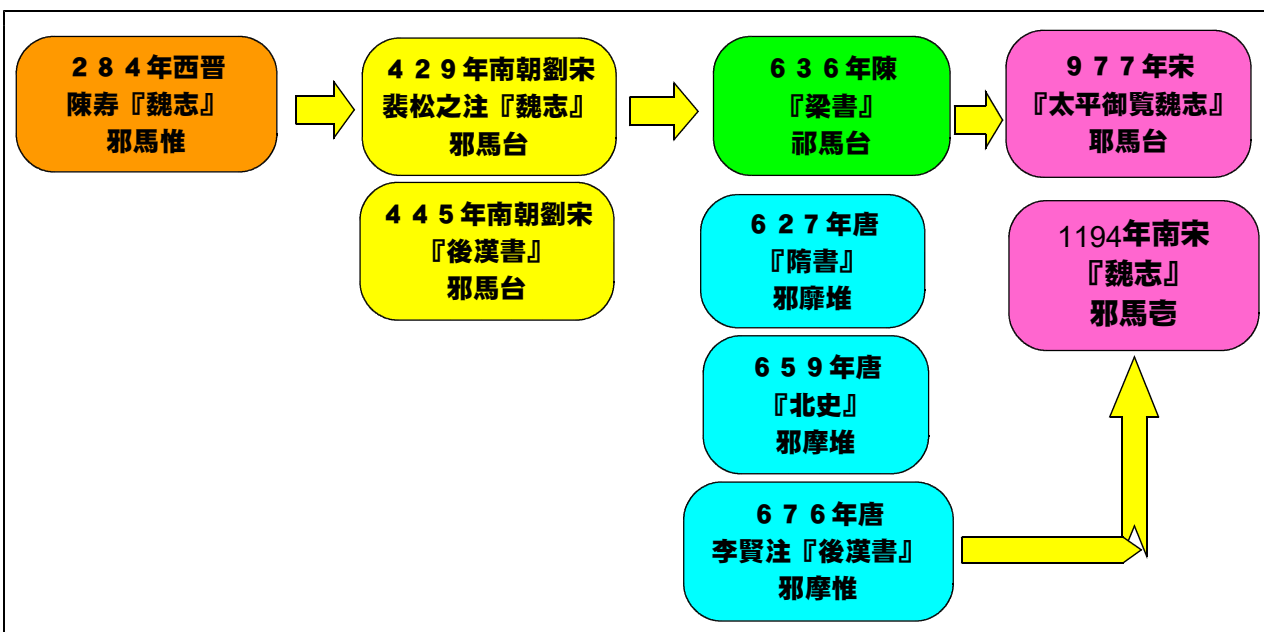
古田武彦：「邪馬壺」の壺は中国天子に対する二心なき忠節という特別な字義だ。

内藤氏は、『梁書』『北史』『隋書』の代弁者、古田氏は、『紹熙本』の代弁者である。全ての研究者は、「台」か「壺」かのどちらかを選択し、その正当性、唯一性を主張する。

ここには、「邪馬台国・邪馬壺国は中国側の命名で、倭人が使った日本語の国名は異なるのではないか」という自立した問いは存在しない。

では、倭人が使っていたと考えられる日本語国名と中国王朝が使った国名を区別して整理してみよう。

- ◆ 3世紀、西晋陳寿は『魏志倭人伝』に倭国について「邪馬惟」と書いたと思われる。「邪馬惟」は倭人の日本語「山結」である。
- ◆ 5世紀、『後漢書』「邪馬台」は南朝劉宋が作った倭国の首都名（中国語）である。
- ◆ 5世紀、裴松之注記『魏志』「邪馬台」も南朝劉宋が作った倭国の首都名（中国語）である。
- ◆ 7世紀、唐『隋書』「邪摩堆」は唐が作った倭国の首都名の変更（中国語）である。
- ◆ 7世紀、陳『梁書』「邪馬台」は南朝劉宋が作った倭国の首都名（中国語）である。
- ◆ 7世紀、唐李賢注『後漢書』「邪摩惟」は倭人の自称、日本語「山結」である。
- ◆ 10世紀、宋『太平御覧魏志』「邪馬台」は南朝劉宗が作った倭国の首都名（中国語）である。
- ◆ 12世紀、南宋『魏志』「邪馬壺」は「邪摩惟」をもとに南宋が作った倭国名である。



(1) 倭国論

『梁書』『北史』『魏志』に紹介される「倭国」とは、熊本市京町を首都とする連邦国家である。だが、連邦国の人々はこの「倭国」を国名として使用していたのであろうか。

「倭国」は連邦国の人々が言った日本語の音を中国側が中国漢字に変換したものであると思われる。では、その日本語音として「倭国」はふさわしいだろうか。「倭」は中国語では「非常に小さい」という意味である。「倭国」は小国、「倭人」はチビという意味となる。

連邦国の人々の日本語音を今、私たちが漢字表記するとしたら、「倭国」ではなく、「姫国」ではないかと思われる。この推測には根拠がないことはない。

『倭人伝』連邦22国の中に「鬼国」がある。「鬼国」の成立は紀元前5世紀、呉の王家「姫氏」による建国である。本来は「鬼」ではなく「姫」である。故、「鬼国」は「姫国」と表記されるべきである。この「姫国」が連邦の始原の国である。

「姫国」が前漢に使節を送った。「楽浪海中倭人あり。分かれて百余国となる。歳時を以て来り献見す」と、『前漢書』に書かれた「倭人」とは「姫の人」である。前漢は「姫の人」を「姫人」と表記せず、「倭人」と表記した。このように考えることができないであろうか。そもそも「倭」は「ワ」と読まれるが、3世紀において「ワ」という音だったかどうか不明である。

「倭国の実体は姫国である」という認識に立てば、「倭国」は「姫国」という日本語で表記するのが最も妥当だと思われる。「姫」は「紀」として、例えば「紀州」「紀貫之」として今日まで伝わり、「姫氏」は、例えば「岸」「吉志」として今でも人名、地名として存在する。

その後、紀元前3世紀には「姫国」だけでなく「楚国」も建国されていく。「楚」の王家は代々「熊」と名乗った。この二つの王家は連邦国家を作った。そして、連邦の王たちは連邦を「山結(ヤマユイ)」と呼ぶようになった。「結」は「結集」を意味する日本語で、国の形である連邦を表している。「山」は普通名詞の「山」を意味する。それだけではなく、首都が存在した熊本市中央区が「山国」と呼ばれていた国である。「山」とは国名である。現代でも「山」を使った「山梨県」「山口県」「山形県」「岡山県」等々の県があるが、それと同じである。首都がある「山国」を中心として連邦が形成された。よって、自国を「山国を中心とした結＝山結」と呼んだのである。

「姫(倭)国」は「姫氏国家」を意味する。一方「山結」は連邦国家を意味する。二つが指し示す実体は異なる。連邦結成以降は「姫(倭)国」はあまり使用されなくなったのではないだろうか。『三国志』『梁書』『南史』『北史』『隋書』では「山結」と表記されべきである。

「山結」は22人の王の国によって構成されていた。

「斯馬国」「己百支国」「伊邪国」「都支国」「弥奴国」「好古都国」「不呼国」「姐奴国」「対蘇国」「蘇奴国」「呼邑国」「華奴蘇奴国」「鬼国」「為吾国」「鬼奴国」「邪馬国」「躬臣国」「巴利国」「支惟国」「鳥奴国」「奴国」「狗奴国」である。

「斯馬国」は福岡県みやま市である。この国は3世紀群島だった。それが国名の由来である。

「鬼国」は熊本県菊池郡に存在した最古の国である。今名「菊池」とは「鬼口」であろう。

「邪馬国」は熊本市中央区である。「邪馬(山)」とは恐らく「阿蘇山」を指す。『隋書』に「阿蘇山」が紹介されている。「山結」の人々はこの火山を「阿蘇山」と呼んでいたのである。「阿氏と蘇氏の聖なる山」が「邪馬(山)国」の国名由来となった。

「鳥奴国」は熊本県宇土市である。宇土市は今日まで『倭人伝』国家名「鳥奴(ウト)」をそのまま伝えている希有な例である。「狗奴国」は熊本市八代市である。ここが連邦の境界である。鹿児島市は全く別の国家である。

この22連邦国の支配下に「狗邪韓国」「対海国」「一大国」「末廬国」「伊都国」「奴

国」「不弥国」「投馬国」の8国が存在した。

「伊都国」は佐賀市、「奴国」は大川市、「不弥国」は筑後市、「投馬国」は沖縄県那覇市である。これらの国々に関する『倭人伝』旅程は現代日本地図と完全一致する。

これら30国を総称して、人々は「山結」と言っていた。

(2) 首都論

「山結」は代々その連邦首都を熊本市中央区京町に置いていた。卑弥呼の時代もここにあった。この首都を南朝劉宋は「邪馬台」と呼んだ。日本語表記では「山台」である。この呼称を使った理由は明白である。まず、「山国」に存在する。そして、京町は台地である。「台」は中国王朝では中央官庁を意味する。南朝劉宋が中央区京町を、「山台(山国の中央官庁)」と呼んだのはまさに的確である。

ところが、南宋は「邪馬壱(ヤマイ)」と変更した。変更は「邪馬惟」に由来する。「邪馬惟」は「山結」であるが、南宋は「惟」を漢音の「イ」と読んだ。故、「邪馬壱」と変更した。日本語表記では「山一(ヤマイ)」である。

南宋は「山一」を連邦名と理解していたか、それとも首都名と理解していたか、不詳である。もし、首都名として作ったのであれば、「山一」は無意味である。「山台」には意味があるが「山一」には「one」の意味もない。「山一」は首都名として全く的外れである。無論、連邦名としても全くふさわしくない。南宋は大事なところをまちがえてしまった。

ところで、「山台」にしても「山一」にしても、この呼称は卑弥呼たちのものではない。中国側の呼称である。卑弥呼の国の人々が京町台地の宮室を何と呼んだかはわからない。日本語的に言えば、「お山」とか「お宮」とか呼んでいたのかもしれない。不詳である。

(3) 「誤記説」「誤写説」「誤刻説」

三木太郎氏は著書『魏志倭人伝の世界』で、岡田英弘氏がその著書に

もしも『魏志倭人伝』を、本気でわが民族の歴史を復原する材料に使おうというのなら、矛盾した言い方で申し訳ないが、その内容をあまり本気で受けとってはいけない。

と書かれた事に対して、次のように述べられている。

たしかにどんな書物も時の政治・権力や時代意識と無縁ではあるまい。だが、そうした大きな力とかかわりながら、なお比較的客観性を保持し、本来の目的性を貫くことが、史家のあるべき姿だったのではないか。中国の史書に、司馬遷の『史記』以来、そうした記録者(史家)の精神が流れていることを否定することはできないように思われる。時代の制約や知識の不正確さが原因で起こる史書の誤りと、思想家のイデオロギーや現実政治への対応の姿勢と同次元の現象と見て、中国史書の事実性を不当におとしめることは、むしろ心して避けるべきではないだろうか。

肝に銘じなければなるまい。唐には李賢という、死をも覚悟して母の専制政治を告発する『後漢書』注を入れた皇太子もいた。いかに相手が強大な権力であろうと、真実を貫く人は居る。そして、いつの時代にもそのような人はいる。人間の精神性を不当におとしめてはなるまい。だが、三木氏の憂慮にもかかわらず、明治から現代に至る我国の『倭人伝』研究は、「本気で受けとってはいけない」という岡田氏の「警告」に従っている。

ほぼ定説(常識)となっていることがらがある。

*『倭人伝』女王国旅程における方角「南」は「東」の誤記である。

*『後漢書』李賢注「邪摩惟」は「耶摩堆」の誤刻である。

- *『紹熙本』「邪馬壺」は「邪馬台」の誤刻である。
- *『紹熙本』「邪馬壺」は7世紀～12世紀に生じた「邪馬台」の誤写である。

しかし、である。

- * 現存する全版本「旅程」は全て「南」は「南」、「東南」は「東南」で一致している。
- * 「邪摩惟」と注記した『後漢書』版本は現存するが、「邪摩堆」と注記した『後漢書』版本は見つかっていない。
- * 「邪馬台」とした版本と「邪馬壺」とした版本のどちらも現存する。

これが中国史書の事実である。

我国研究者の「誤記」「誤写」「誤刻」説オンパレードは「史家の事実記録の精神性」「刊本作製学問集団の見識・調査研究」「書写生・版工・印刷工の専門性」への「貶め」そのものではないだろうか。

「(私はそれと分かっているが)歴代中国王朝の史家、学問集団、あるいは技能者集団は誰一人として「誤記」「誤写」「誤刻」に気づかず、訂正、改訂も行わず史書を編纂、刊本を作製してきた」という”思い込み”はあまりにも不遜ではないだろうか。

「南」は「南」、「東南」は「東南」、「邪摩惟」は「邪摩惟」、「邪馬台」は「邪馬台」、「邪馬壺」は「邪馬壺」、それぞれ「事実」として「本気で受けとり」、そのまま研究の原点に据えることが我が国の研究者のとるべき姿勢と私には思われる。それが三木氏の本意であろう。

(4) 『倭人伝』の真の著者は「倭人」

『倭人伝』については、我が国の研究者の間で評価が分かれる。信憑性を疑う意見も多くある。「方角南は東の誤りである」というのはその代表である。「中国人は歴史の真実を書かない伝統を持っている」という一般論も同様である。

確かに『倭人伝』は西晋陳寿が書き記した本である。著者は中国人である。この事実が我が国の研究者の『倭人伝』不信の根本にある。

『倭人伝』は洛陽から見て遠く東の海中に存在する「倭」について、22の連邦国名、女王、官、戸数、身分、家族制度、衣服、農作物、動物、木、武器、食事、葬儀、税、果ては文身、祈禱などの風俗に至るまで、ありとあらゆる情報を収集し記録している。我が国の最古の史書である『記紀』に韓国、中国の情報が少しでも記載されているであろうか。

『日本書紀』は「奈良の日本国」の欠落史を『百濟本紀』などから補っているが、これは百濟に関する情報を記載したのではない。百濟が日本国について収集した記録を借用したというだけのことである。

歴代中国王朝が「情報国家」であり、「記録国家」であることは、我が国の『記紀』と比較して歴然としている。『倭人伝』への感想を述べるとしたら、「その記事には誤りがある」という不信感とは正反対である。「なぜ、これほど正確な記事を書くことができたか」という驚嘆である。

『倭人伝』女王国旅程は現代の正確なネット情報に慣れた私たちから見れば完全だとは云えない。だが、「国」「方角」「里」は現代地図上復元できる。実に正確である。女王国旅程は魏にとって異国の旅程である。その旅程記事が魏使の見聞、調査によるものだと言うにはあまりにも正確、あまりにも詳細すぎるのである。

陳寿は女王国ルートを「倭」と「魏」の外交ルートとして書き、現代の私たちもそう受け止めているが、元来は外交ルートではない。魏朝以前の遙か昔から「山結」の人々が大陸の窓口である「狗邪韓国」と女王の都を結ぶ経済交流・文化交流のために切り開いた交易ルートである。その交易ルートの「方角」「里」「戸数」「官名」などは「山結」が管理する情報である。その情報を陳寿は知っていた。だが、一方で、連邦の中枢である22の国について、陳寿

はほとんど何も知らなかった。「山結」は22の国名は教えたが、「阿蘇」「鉄」「ベンガラ」などは教えなかったのである。ここには「山結」側の情報管理があったと考えてよい。重要な情報は渡さなかったのである。

このように『倭人伝』を分析すれば、『倭人伝』は中国人陳寿が作った史書であるが、その元となった情報は「山結」の提供であると言えよう。

「倭人伝は山結の管理下の情報だった」と考えれば、旅程に不弥国から女王国への最終ルートの記事がないことに納得がいく。

女王の都に行くにはまず筑後市に行かなければならない。筑後市までは一本道、誰でも到着できる。問題はここからである。「えっ、乗船?」、これがまず想定外である。そして、筑後市から有明海に船出する。ところが、陸の道は見えるが、海の道は見えない。有明海は四方陸に囲まれている。周囲にいくつもの国があり、いくつもの港がある。「どこに向かう?」「どの港?」といった肝腎の情報がなくて、どうして先に進めようか。

女王の都は熊本平野の最北部、熊本市中央区京町台地にあった。有明海から最も行きにくい場所である。筑後市から有明に船出して、京町に到達することなど誰にできようか。AIを駆使する現代研究者にしても女王の都に到達できた人は誰一人いない。

到着不能にしたのは「山結」の情報管理である。都の位置は「山結」にとってトップシークレットである。魏に明かしたはずがない。そして、「(不弥国)南水行20日投馬国」と、筑後市から那覇市への「水行ルート」をこれ見よがしに教えた。人は「南に向かう船は投馬国行きの船だ」と思っても不思議ではない。ところが、女王の都へもまた船で南に向かうのである。都への船と投馬国への船は島原付近まで全く同じ航路をとる。「あの船は女王の都に行く船だ」と見抜ける人など一人もいない。投馬国ダミー航路のおかげで、都への航路は完全に秘された。こうして、南への航路は投馬国航路のみとなった。結果、旅程は「女王の都は投馬国を経る」とならざるを得なかった。

『梁書』『太平御覧魏志』に書かれた「不弥国→投馬国→女王の都」旅程はその結果である。首都防衛に周到な配慮をしていたといえる。その配慮は現代でも有効である。現代の研究者も、また、「投馬国ダミールート」に翻弄されている。

『倭人伝』は中国人が書いた本である。が、その情報は「山結」発、「山結」管理下の情報である。『倭人伝』の「真の著者は山結」と言っても良いかもしれない。中国人への不信に立つて、「旅程の南は東の誤りだ」といった発言は、天に唾する行為である。

岡田英弘氏は「本気でわが民族の歴史を復原する材料に使おうというのなら、矛盾した言い方で申し訳ないが、その内容をあまり本気で受けとってはいけない。」と述べているが、真理は逆説的である。こう言うべきである。

『倭人伝』はわが民族の歴史を復原する材料である。何故なら、『倭人伝』は倭人による著作同然と言えらるからである。その内容を本気に受けとるべし。

『倭人伝』はわが民族による著作同然の史書である。そこに記された歴史はわが民族の歴史である。だが、まちがえてはいけない。その歴史は「山結」と自称し、歴代中国王朝、歴代韓半島王朝と交流してきた熊本平野に栄えた30連邦国家の歴史である。決して「神武天皇家」の歴史ではない。「山結」と「神武天皇家」とは全く別の国家である。当然、『倭人伝』と『記紀』は全く異なる歴史書である。『記紀』を主とし、『倭人伝』を従とする従来の研究方法は全くの誤りである。

『倭人伝』は極東アジアにおいて国際的な地位を確立していた「山結」の歴史書として、そのままに尊重され、そのままに研究されるべきである。

